

「明日香村の歴史展示のあり方」有識者座談会意見概要

歴史認識について

内 容
歴史的認識というとき、ナショナリズムの問題に突き当たる。現在のナショナリズムが古代まで投影されてしまふところに難しさがある。これを克服するには、東アジア文明全体の中での日本文化という視点、つまり東アジア文明から歴史認識を説き起こすことが必要。東アジア文明全体を見ることで、歴史認識ができる。
歴史の値打ちを国なり地域が証明するという課題と、ナショナリズムとのジレンマは感じる。深掘りするとナショナリズムとか韓国と云々いうが、これは展示の仕方見せ方による。歴史の事実を歪めるナショナリズムには「事実に基づきましょう」と主張すればよい。
外来文化の受容と伝統文化の葛藤。これは、1300年前もグローバル化した現在も同じ課題。だからこそ、いま明日香の歴史をどう認識するかの議論が必要。

歴史展示のあり方

全体を踏まえた総合的な展示という点の議論が欠けていると思う。外国の方に、明日香の歴史を全体的に理解してもらえ展示施設が必要である。ビジュアルや人の語り(=翻訳=インタープリター)などで、明日香の価値をいかに語らせるか。明日香は、日本・東アジアの歴史的な遺産の語らせ方の見本となるようなことをしても良い地域である。
--

・歴史展示の基本方針

韓国などとの歴史を公正に展示するのは、奈良全体の課題。明日香の値打ちがどこにあるかを意見を聞きながら、事実は事実として、縁のあるものは縁として、明らかにしていくことが必要。縁とか交流の跡等をなるべく積極的に展示するというのが、歴史展示の基本方針の一つの切り口。これまで、キッチリ打ち出してこなかったことが問題。地域には、文化的価値を見だし展示する義務があると考え、だから必至になっている。
明日香の値打ちは、明日香の人も奈良の人も分かっていない。逆に東京の人などが分かっている。その値打ちを奈良の人に迎合しないで高尚に考えて展示していくことを歴史展示の基本方針としたい。
平城宮で大極殿や朱雀門は半島や中国の建築様式だが、大極殿の後の御座所は、飛鳥と全く同じ掘っ立て柱の建物がルーツ。平安京内裏も白木の建物で、瓦も葺かないのに対し、政治向に瓦も葺き色も塗るのが朝鮮・唐風である。このような日本文化の「二元性」も、歴史展示のあり方の基本理念の中に入れたら良い。 なお、蝦夷など国内での交流も認められることから、日本文化は「二元性」ではなく、「多様性」の中で律令国家が形成されたという考えもある。
オーソリティがあるかないかは別にして、県が中心となって明日香村の歴史展示のあり方について検討していく。それを平成22年度からの次期明日香村整備計画の中に盛り込んでいく。

・歴史展示の方法

縁があるということで、観光の方を奈良へつれてくると、ガッカリされるという声をよく聞く。来県者をつかりさせないため精一杯おもてなしをするとともに、説明力をどう与えるか。歴史の感動というのは分かる奥深い物がある。ファシリテーション(助長)とコンテンツを念頭に入れないと感動が起きない。
発掘したものを、復原展示していくのか、また埋め戻していくのかのポリシーの確立が必要。学会の方に伺いたい。
展示物は、レプリカでも借り物でも構わない。あるコンセプトを提示するためには何を持ってくるか。提供したから、歴史を学びなさいというスタンスで、相手に任せたらよい。沈黙の博物館ではなく、雄弁な博物館が求められている。理屈を知って語るという雄弁さもあるが、人を連れてきて語らせるのも一つの展示の方法。
明日香の埋蔵文化財にどう価値を付けて、体感できるようにするのがポイント。石の文化なので、中に埋もれているものを発掘すると、結構立体的に見せられる可能性がある。

明日香の歴史のあり方がわかる展示ということでは、できる限り発掘された場所での現地保存に重きをおくべきである。

発掘した人が所有権を取得してしまうのは問題である。発掘後埋めずに見せるために鞘堂をつくったり、天蓋で覆ったりする保存が大事。

・具体的復原案

内 容
飛鳥京苑池遺構の復原の優先順位が高いと思う。復原されれば映画やドラマで使用される可能性も高い。
飛鳥寺の塔を復原するのが一番良い。技術的にも中国・韓国の学者の力が必要であり、日韓併合100年の逆発信の意味からも相応しい。その他、飛鳥浄御原の正殿復原や島庄遺跡の復原なども考えられる。また、律令制と言え、役人の時間を管理した水落移設の復原も考えられる。 ただ、飛鳥寺の塔については、全く構造が分からないため、復原には困難が予想される。

・具体的展示案

キトラ古墳、高松塚古墳の近くに、東アジアの壁画古墳のデジタル画像で良いと思うので、それを一堂に展示する施設を作ること考えられる。
韓国慶州では、古墳公園を造るため、2,3千軒の家を全部撤去させた。明日香の場合、ビューポイントのために、役場の前周辺の一部について、家を撤去すべきと言うのも一つのテクニック。
大字飛鳥あたりで、数メートルでもよいから、昔風の歩道、ペーブメント(石を敷き詰めた歩道)として復元することも考えられる。
CGあるいはインタープリターとして誰かがガイドが居て喋らせるとかも含めて多様な手法の活用が考えられる。一方で、生きたガイドは煩わしいという人もいる。そのような人向けに石に仕掛けをしておき、耳にイヤホンガイドを付けるのはどうか。
万葉文化館と一体となった古代文化館の設置(大きな建物でなく、起伏を利用した、見え隠れする構造のもの)が望まれる。 また、飛鳥学の研究センターというべきものがない。万葉文化館は、東アジア文化館として建築関係の研究も扱い、また観光拠点・研究拠点とするべき。
万葉文化館の展示のあり方は、県としては一つの課題と認識。明日香の観光の拠点として考えていきたい。明日香に来たら、とにかくここに来て、歴史認識や体験をして欲しい。すでにレストラン開業や、駐車場無料化の検討を行っている。総合的拠点として脱皮するか課題はあるが、出来ると思っている。
万葉文化館と既存の博物館(飛鳥資料館、檀考研博物館)との有機的ネットワークが必要。そのためには、役割分担やテーマを確立しないと統一性が取れない。

観光、景観その他

どこをどのように回ってもらうのかと言うとき、優先的に何をみってもらうのかという展示ポリシーがないと、動線構築ができない。 ストーリー性(物語性)が必要ではないか。例えば、仏教コース、宮殿コース、苑池コースなどの。
里山景観を広葉樹林にすべき。高野槇を植栽し、古代(景観)に復原するのもよいのではないか。また、明日香村に竹藪はいらない。
歴史的景観というが、本当に歴史的景観を保存するなら、飛鳥の時代に遡らなければならない。血で血を洗うような風景になる。当時こんな豊かな田園風景があったのか疑問。 明日香全部が宮であり、壮大な人工的な場所だった。当時、民家はなかったのではないか。治水工事から始めたため、石が必要でたくさん運び込んだ結果が今日の石の遺跡。
明日香にふさわしい、環境に配慮した小型電気自動車などで、シャトルバスのように運用することも考えられる。
仏教伝来の桜井市と明日香村とのリンク、また、世界遺産とも関連するが、高取町や檀原市域など周辺も含めたバックアップが必要。
県、国、村の区別なく、県のコントロールの中で第三者的な発掘体制の構築が必要と思われる。縄張り争いの解消にはポリシーが必要。